

第107回貴重書展

# 英国の本の世界

ホーンブックからペーパーバックまで



期間：平成17年10月12日（水）～10月30日（日）

会場：鶴見大学図書館1階エントランスホール展示コーナー

～ご紹介～

## 英国の本の世界 ホーンブックからペーパーバックまで

イギリス文学を研究する多くの者にとっては、その研究対象はことばによる文字情報、テキストである。そして、そのテキストがどのような媒体で伝達されようとも、それが廉価版の紙装の本であっても、ハードカバーの本であっても、その情報には質的な違いはない。ともすると、本という媒体は既に過去のものになりつつあり、様々な機関が印刷資料の電子化を推進する中、電子テキストを利用する研究者も多い。また、現代作家の中にはネットで作品を発表するものもあり、その場合は本を用いた研究は行われ得ない。

しかし、本の情報と電子メディアによる情報の間に、本当に質的な違いはないのであろうか。アメリカの小説家、ニコルソン・ベイカーはそう考えていない。長期保存を目的としてマイクロフィルムその他のメディアにうつされた後、多くの古い貴重な資料が英米の図書館から廃棄されているようにしている。2000年にその事実をベイカーは告発し、ブリティッシュ・ライブラリーをはじめとする図書館がその後の論争に参加した。彼によれば、電子化によって再現することが不可能な情報があまりにも多いというのである。

文学研究の分野においても、特に出版文化史との関連で、オリジナルの資料、作品が発表された時そのままの資料の重要さが増している。当時の読者がどのような本を手にしていったのか、それが大型のものだったのか、ポケットに入るような小型版だったのか、広告が付けられていたのか、付けられている場合はどのような広告だったのか、などということは作品の受容に少なからず関係する。そして、そのような情報は当時の読者がどのような読書環境におかれていたのかを我々が知る手がかりとなる。また、オリジナルの資料は、当時の印刷技術のありようを今に伝えるものでもある。

今回の展示を企画するにあたって、いま述べたようなことを念頭においていた。不断は目にすることが難しい貴重な資料をご覧いただきたい。

文学部講師 渡辺一美

## ～展覧リスト～

= 個人蔵

1. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner.* 2nd ed. London: William Taylor, 1719.
2. ---. *Robinson Crusoe.* 3rd ed. London: William Taylor, 1719.
3. ---. *Robinson Crusoe.* 4th ed. London: William Taylor, 1719.
4. Hornbook.
5. Hornbook.
6. Hornbook.
7. Battledore.
8. *The History of Valentine and Orson.* N.p.: Company of Walking Stationers, c. 1795.
9. *Jack the Giant Killer.* Banbury: J. G. Rusher, c. 1820.
10. *History of Eugene Aram.* Newcastle upon Tyne: W. and T. Fordyce, c. 1840.
11. *An Alphabet of Animals.* London: Simpkin, Marshall, n.d.
12. [More, Hannah.] *The History of Tom White.* Cheap Repository Series. London: J. Marshall, 1795.
13. [More, Hannah.] *The Carpenter; Or, the Danger of Evil Company.* Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.
14. [More, Hannah.] *The Market Woman, a True Tale; Or, Honesty is the Best Policy.* Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.
15. [More, Hannah.] *The Riot; Or, Half a Loaf is Better than No Bread.* Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.
16. Boreman, Thomas, ed. *A Description of Three Hundred Animals.* 1730. London: J. F. and C. Rivington, 1786.
17. Sutcliffe, John. *My Own ABC of Quadrupeds.* Edinburgh: W. S. and J. K. Milne, 1846.
18. *History of British Birds.* Vol. 1. Newcastle upon Tyne: Printed by Sol. Hodgson, for Beilby and Bewick, 1797.
19. *History of British Birds.* Vol. 2. 1804. 2nd ed. Newcastle upon Tyne: Printed by Edward Walker, for T. Bewick, 1805.
20. Braddon, Mary Elizabeth. *The Doctor's Wife.* 3 vols. London: John Maxwell, 1864.
21. Dickens, Charles. *The Mystery of Edwin Drood.* 6 nos. London: Chapman & Hall, 1870.
22. Braddon, Mary Elizabeth. *The Golden Calf.* 1883. London: John and Robert Maxwell, c. 1886.
23. Blackmore, R. D. *Lorna Doone.* 1869. London: Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, 1890.
24. Disraeli, Benjamin. *The Wondrous Tale of Alroy.* 1833. London: Frederick Warne, 1888.
25. Pemberton, Max. *Pro Patriâ.* 1901. London: Ward Lock, 1907.
26. Doyle, Richard. *In Fairyland: A Series of Pictures from the Elf-World.* London: Longman, 1870.
27. Caldecott, Randolph. *Sing a Song for Sixpence.* 1880. London: Frederick Warne, n.d.
28. Greenaway, Kate. *Under the Window: Pictures and Rhymes for Children.* 1879. London: Routledge, n.d.
29. Greenway, Kate. *A Apple Pie.* 1886. London: Frederick Warne, n.d.
30. Tennyson, Alfred. *Poems.* London: Moxon, 1857.
31. Morris, William. *The Well at the World's End.* 1892. London: Kelmscott Press, 1896.

## ～ 解題 ～

### 【18世紀はじめ：イギリス最初の小説】

1. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. 2nd ed. London: William Taylor, 1719.
2. ---. *Robinson Crusoe*. 3rd ed. London: William Taylor, 1719.
3. ---. *Robinson Crusoe*. 4th ed. London: William Taylor, 1719.

イギリス最初の小説とは何かという大問題については様々な意見があり、実際に17世紀後半には小説的な要素を持った作品が数々イギリスに登場していたが、その内容と影響力の点から見て、1719年に出版された『ロビンソン・クルーソー』がイギリス最初の本格的小説の有力な候補である。5シリングという、当時としては比較的高価な本にも関わらず、1000部（あるいは1500部ともいう）の初版が4月25日に出された後、同年5月12日（第2版）、6月6日（第3版）、8月8日（第4版）と版を重ねたほか、数多くの海賊版が出回った。

それぞれの版を確認するには、この第2版の通り標題紙を見れば分かるが、実際には本文にも細かい違いがある。第3版と第4版の相違は、例えば46ページでは、(i) 第3版では空白になっている箇所に、“the 1st of Sept. 1659”（1659年9月1日）と日付が入っている、(ii) 下から9行目の *Affrican* *African* の綴りの違い、47ページでは、(iii) 1行目の方角を示す “N. E. by N.” がイタリックから立体なった結果、第1段落全体が調整されている、(iv) 下から2行目の *Carribbee* *Carribbee* の違いなどである。

当時の印刷では、職人がひとつひとつの活字を手作業で拾って活字が組まれていた。また、活字の材料となる金属が高価であったため活字の数に限りがあり、印刷が終わるとすぐに活字はばらばらにされ次の印刷に使われた。そのため、『ロビンソン・クルーソー』のように好評を得た本を増刷する時には、はじめから活字を組み直さなければならない。このため、(i)のように新たに訂正された箇所が直されるだけでなく、場合によっては、(ii)、(iv)のような当時の表記法のゆれを示すような違い、あるいは活字を組んだ職人のミスによる人為的な間違いが生じることもあり、全体として版の間の違いとなってあらわれる。

ちなみに、(i)の日付が入るのは第3版からだといわれるが、この版は2種類存在し、この日付のないものは第3版のはじめの版とされる。このように、標題紙上は同じ版であっても異版がある場合もある。

### 【18世紀：文字を覚えるための本、初学者向けの本】

4. Hornbook.
5. Hornbook.
6. Hornbook.
7. Battledore.

『ロビンソン・クルーソー』の読者は、識字率の高い富裕層だったと考えられるが、一般民衆は

どのようなものを読み、そしてどのように文字を学んでいったのだろうか。18世紀を通じて慈善学校、日曜学校などの民衆学校が設立され、そこではホーンブック(hornbook)とよばれるものが初学者用に用いられた。これは本というよりも、ふつうアルファベット、数字、主の祈りなどを書いた紙を透明な角質(horn)の薄片で覆い、それを柄付きの枠に収めたものである。ここで紹介するのは、角質の板に直接文字を書いたものと刻んだものであるが、6.には、?のかたちの“long s”がrとsの間に刻まれている。これはsの異字体で、18世紀頃まで用いられた。例えば、先の『ロビンソン・クルーソー』の46ページの1行目では“own Interest”が“own Intere<sup>?</sup>”となっている。また、このホーンブックでは&のほか、a e i o uの母音字が別に刻まれている。このホーンブックから分かるのは、これが文字を「読む」ことを覚えるために用いられ、「書く」技能を習得するために用いられたわけではないということである。「読み書き」とはいつても、長い間このふたつは全く別の技能と考えられた。すなわち、「読む」ことはキリスト教信者として聖書を読むために必須であったとしても、「書く」ことは算数と同じように職業上必要な技術と考えられ、一般民衆に教えられることは少なかったのである。このホーンブックは、次第に7.のようなバトルドリア(battledore, 羽子板の意味)とよばれる紙製の印刷物に代わっていった。

8. *The History of Valentine and Orson*. N.p.: Company of Walking Stationers, c. 1795.
9. *Jack the Giant Killer*. Banbury: J. G. Rusher, c. 1820.
10. *History of Eugene Aram*. Newcastle upon Tyne: W. and T. Fordyce, c. 1840.
11. *An Alphabet of Animals*. London: Simpkin, Marshall, n.d.

文字を覚え始めた人々に読み物として人気があったのは、チャップブック(chapbook)である。これは、たいてい4から16ページ、あるいは24ページからなる安価な小型の本を指し、チャップマン(chapman)と呼ばれたよろず行商人によって売られたためこの名がついたともいわれる。安く売るために紙の質は悪く活字は磨滅したものを使い、木版の挿絵も使い回しが多い。内容には、騎士道ロマンス(8.)、民話(9.)、犯罪録(10.)、バラッド、あるいは『ロビンソン・クルーソー』などの人気があった小説の再話などが含まれる。

チャップブックに16ないし24ページのものが多いのは、ページの印刷方法が関係している。大型のページは別として、1枚の紙に複数のページを印刷しなければ効率が悪い。したがって、8.のように片面8ページ、両面で16ページ印刷し、3回折ったのち一边を綴じ、ページの端を切ることによって、16ページの本を作った。この判型を八折判(octavo)と呼ぶ。(下図参照)チャップブックはたいてい折り置まれただけで売られ、買った者が綴じて端を切ったため、8.のようなものが残っている場合もある。

5	12	9	8
4	13	16	1

八折判(表版)

## 【18世紀末：ハンナ・モアと「廉価版叢書」】

12. [More, Hannah.] *The History of Tom White*. Cheap Repository Series. London: J. Marshall, 1795.

チャップブックには作者不詳のものが多いが、作者として分かっている数少ない例がハンナ・モアである。日曜学校の設立にも関わった彼女は、貧しい階層の教育を目的として「廉価版叢書」(Cheap Repository Tracts)と呼ばれる数多くのチャップブックを出した。1795年から1798年の間に114冊の本が出され、そのうち彼女の“Z”のペンネームで書かれたのが約50冊ある。その部数は、1795年だけで2万冊出版されたといわれ、その多くが彼女に賛同した篤志家によって買い上げられ日曜学校などに無料で提供された。フランス革命後の不穏な状況の当時、教育者としての彼女の目的はあくまでもチャップブックを通じた宗教・道徳教育によって体制を維持することにあったが、結果として文字を読めるようになった庶民は、あるものは政治的な読み物を、あるものは彼女が非道徳的だと考えるような娯楽を目的とした小説を手にしたことであろう。

13. [More, Hannah.] *The Carpenter; Or, the Danger of Evil Company*. Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.

14. [More, Hannah.] *The Market Woman, a True Tale; Or, Honesty is the Best Policy*. Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.

15. [More, Hannah.] *The Riot; Or, Half a Loaf is Better than No Bread*. Cheap Repository Series. London: J. Marshall, c. 1796.

この「廉価版叢書」は、チャップブックだけではなく、うちバラッドについてはブロードサイド(broadside)と呼ばれる形態でも出版された。ブロードサイドの起源は、市場に貼られたポスターにあるとされるが、チャップブックのように多様な内容のものが印刷されて広告以外の役割を果たすようになる。ブロードサイドは宿屋やパブの壁に貼られ、より多くの人が目にした。

## 【18～19世紀はじめ：挿絵の印刷技術】

チャップブックに見られるように、今以上に挿絵の役割は大きかった。19世紀はじめ頃までの挿絵の印刷方法には大きく分けて3種類ある。凸版印刷(relief printing)は、チャップブックに使われた木版(woodcut)を含み、その長所は木の板の高さを活字の高さと合わせることにより、文字と挿絵を同じページに印刷できることにある。(右図上)

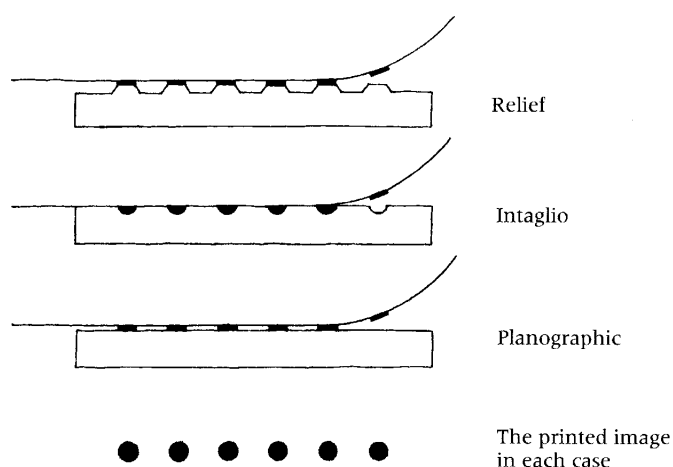
16. Boreman, Thomas, ed. *A Description of Three Hundred Animals*. 1730. London: J. F. and C. Rivington, 1786.

ふたつめは、凹版印刷(intaglio printing)で、銅版の表面を直接彫るか(copper engraving)、腐食させる(etching)ことでできる凹部に残ったインクに、紙を強く圧着することによって印刷され

る。木版にくらべて細かい描写や明暗の階調を表現できるが、活字と同時に印刷できない、印刷に手間がかかるという短所がある。**16.**では、挿絵のある左ページが銅版による印刷で、活字で印刷された右ページとくらべると、状態に明らかな差を見てとれる。(下図中)

- 17.** Sutcliffe, John. *My Own ABC of Quadrupeds*. Edinburgh: W. S. and J. K. Milne, 1846.

上の二つの印刷法の歴史は古いが、1798年に発明された新しい技術が石版印刷(lithography)で、これは平版印刷(planographic printing)に属する。この場合、版面を彫らずに画家が石板に描いた図をそのまま印刷することができるという利点がある。**17.**のように柔らかな印象を与える特徴がある。(下図下)



Michael Twyman, *The British Library Guide to Printing: History and Techniques* (1998)より

- 18.** *History of British Birds*. Vol. 1. Newcastle upon Tyne: Printed by Sol. Hodgson, for Beilby and Bewick, 1797.

- 19.** *History of British Birds*. Vol. 2. 1804. 2nd ed. Newcastle upon Tyne: Printed by Edward Walker, for T. Bewick, 1805.

チャップブックでわかるとおり、木版の挿絵は単純素朴という印象を与える。この木版の技術を大きく変えたのがトマス・ビューイック(Thomas Bewick)で、彼は堅い材質のつげの木を輪切りにした木口の版木を用いて、銅版に似た細かさや階調を表現することを可能にした。この木版印刷法は木口木版(wood engraving)とよばれ、次第に凹版印刷に代わり挿絵印刷の主流を占めるようになる。

## 【19世紀：ヴィクトリア朝の小説出版】

**20.** Braddon, Mary Elizabeth. *The Doctor's Wife*. 3 vols. London: John Maxwell, 1864.

1巻本の『ロビンソン・クルーソー』で始まったイギリスの小説であるが、18世紀には特に決まった巻数があったわけではなく、小説の長さによって巻数が決まった。これに変化が現れるのが1821年、ウォルター・スコット(Walter Scott)の『ケニルワース』(*Kenilworth*)が、3巻本、31シリング6ペンス(1ギニー半)という形態で出版された時である。スコットは当時随一の人気作家であるため、このような比較的高い値段を付けることができたが、結果としてこの1ギニー半の3巻本(three decker、あるいは triple decker)の形態が他の小説にも採用され、小説の初版の出版形式として定着することになる。

小説が高価であったといっても、一部の人々しか小説を読むことができなかったわけではない。この3巻本の形態が長らく維持できたのは、これが出版社と読者と、そして貸本屋(circulating library)と呼ばれる当時特有の存在との間の妥協の産物であったからだ。この貸本屋が大きな影響力を持ち出すのは19世紀になってからで、ミューディーズ(Mudie's)が最大手の貸本屋であった。貸本屋から本を借りるためにはたいてい1年間あたり1ギニーの会費が必要で、これで一度に1冊の本を借り出すことができた。ひとつの小説が3巻に分かれているために、同じ小説を別の3人の会員に貸し出すこともできるし、会員が一度に3巻借りたいという場合は3倍の会費を徴収することもでき、貸本屋にとっては利点があった。出版社にとっては、貸本屋が大量に本を買い取ってくれるため、安定した供給先を得ることができた。また貸本屋は、出版社に本の値引きを要求することもできた。ただし、作家にとってメリットがあったかといえば必ずしもそうではない。例えば、エミリー・ブロンテ(Emily Brontë)の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)は3巻本の長さに満たないので、妹アン・ブロンテ(Anne Brontë)の『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*)と合わせて3巻本の体裁で出版されるなど、その形態が作家にとって制約となる場合もあった。

**20.**の小説はヴィクトリア朝中期に非常に人気のあった小説家メアリー・エリザベス・ブラッドンのもので、その表紙に貼られたラベルからわかるとおり、実際にミューディーズで貸し出され、1867年に役目を終えて古本として売られたものである。

**21.** Dickens, Charles. *The Mystery of Edwin Drood*. 6 nos. London: Chapman & Hall, 1870.

最初から本として小説を発表する、19.のように雑誌連載あるいは新聞連載を本にするほかに、当時行われていた小説の発表形式は月刊分冊(monthly parts)であり、チャールズ・ディケンズの『ピクウィック・ペイパーズ』(*The Pickwick Papers*, 1836-7)の成功によって一般的になった。ディケンズの場合には、小説全体がそれぞれ32ページからなる全20の部分に分けられ、19ヶ月にわたって(最後の月は2回分)発表される。いわば月賦で小説を買うようなもので、分冊1冊につき1シリング(最終号2シリング)と比較的値段が手頃であったため人気を得た。**21.**は、ディケンズの未完の小説、『エドウィン・ドルードの謎』で、ディケンズが亡くなったため第6号で

終了している。第 6 号には、標題紙、目次などが付けられ、これを用いて全分冊を一冊に装丁し直すこともできるようになっている。このような当時の月刊分冊が重要なのは、これに付けられた広告を通して、当時の読者の暮らしが分かるからである。消費の拡大によって広告が重要になったこの時代、人気作家ディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』の第 1 号には、小説の本文 32 ページ対して、“Edwin Drood Advertiser”と呼ばれる広告が 63 ページもつけられている。広告にも様々な工夫が見られ、第 2 号の帽子の広告には素材のコルクが見本として挟みこまれている。

22. Braddon, Mary Elizabeth. *The Golden Calf*. 1883. London: John and Robert Maxwell, c. 1886.
23. Blackmore, R. D. *Lorna Doone*. 1869. London: Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, 1890.
24. Disraeli, Benjamin. *The Wondrous Tale of Alroy*. 1833. London: Frederick Warne, 1888.
25. Pemberton, Max. *Pro Patriâ*. 1901. London: Ward Lock, 1907.

19 世紀は広告の時代でもあったが、鉄道の時代でもあった。鉄道路線の拡張に伴って、郊外から都市部へ通勤する人々が増加し、そのような読者向けに手頃なサイズの本が 1850 年代頃から出版され始める。鉄道小説('railway' novel)とも呼ばれるイエローバック(yellowback)は、その名の通りたいてい黄色いボール紙で装丁されていた。価格は 1 から 2 シリングと廉価であった。3 巻本の小説はイエローバックとして出された後、24、25 のような、6 ペンスとさらに安価な紙装丁のペーパーバック(paperback)として再刊される。

出版社としては、これらの安価な本を読者に売り込む事情があった。3 巻本の小説で得られる儲けでは著者印税を含む初期コストを相殺するのみで、出版社に利益が出なかったからである。3 巻本の初版から廉価版が出版されるまでの期間は次第に短くなり、結果、貸本屋は十分な利益を上げることができなくなっていく。雑誌全盛の時代が到来し短い小説が好まれるようになったこともあり、3 巻本は 1894 年を最後に姿を消し、貸本屋のミューデイズも 1937 年に廃業することになった。

ちなみに、24 の裏表紙のペアーズ社の石鹼広告は、現代の大規模な化粧品広告のはしりである。

## 【19世紀後半：多色刷り木版と、芸術としての書物】

26. Doyle, Richard. *In Fairyland: A Series of Pictures from the Elf-World*. London: Longman, 1870.

27. Caldecott, Randolph. *Sing a Song for Sixpence*. 1880. London: Frederick Warne, n.d.

28. Greenaway, Kate. *Under the Window: Pictures and Rhymes for Children*. 1879. London: Routledge, n.d.

29. Greenway, Kate. *A Apple Pie*. 1886. London: Frederick Warne, n.d.

挿絵をその売りものにした雑誌『パンチ』(Punch, 1841年創刊)、新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(The Illustrated London News, 1842年創刊)などの登場によって挿絵の需要が増す中、木口木版の技術は完成を極め、19世紀後半には多色刷り木版の技術が完成する。ここに紹介する本はすべて、多色刷りを専門とした彫版師、印刷職人のエドモンド・エヴァンズ(Edmund Evans)の仕事によるものである。26.は『パンチ』の挿絵画家として活躍したリチャード・ドイルの作品。ランドルフ・コールデコット(27.)、ケイト・グリーナウェイ(28.、29.)が挿絵を描いた子ども向けの「トイ・ブック」(toy book)とよばれる本は、現代の絵本の先駆けとなる作品である。

30. Tennyson, Alfred. *Poems*. London: Moxon, 1857.

31. Morris, William. *The Well at the World's End*. 1892. London: Kelmscott Press, 1896.

19世紀中頃まで主流であったテキストを説明する補足的な挿絵ではなく、挿絵それ自体の芸術性を確立することになるのが、いわゆる「モクソン テニソン」(Moxon Tennyson)と呼ばれる29.である。この詩集の挿絵には、伝統的な挿絵画家のほか、新しい芸術運動であったラファエル前派に属する3人が参加している。前者の画家たちが詩の内容に忠実な挿絵を画いた一方、後者の画家たちは詩から想起されるイメージを挿絵として再現し、作者のアルフレッド・テニソンが当惑するほどであった。ウィリアム・ホウルマン・ハント(William Holman Hunt)が下絵を描いた「シャーロットの女」(The Lady of Shalott)の挿絵は、別に大小2枚の油彩として完成され、彼の代表作の一つとなる。

このラファエル前派と関係していたウィリアム・モリスは、1891年ケルムスコット・プレスを設立し、芸術性の高い書物を刊行した。31.の『世界の果ての泉』に見るような「チョーサー体」と呼ばれる活字は、中世の写本あるいは初期の活字を参考にデザインされている。挿絵はモリスの友人でもあったラファエル前派の画家、エドワード・バーン＝ジョーンズ(Edward Burn-Jones)のものである。先に見たように、ますます安価な本が出版され読書の大衆化が進む中で出版されたケルムスコット・プレスの本は、芸術品としての本の完成型を今に伝える。